

## 序に代えて

本書の発行元である一般社団法人倫理研究所は、昭和二十年九月の創始以来、倫理の研究ならびに実践・普及を通して、生活の改善や道義の昂揚、文化の発展を図り、それによって民族の繁栄と人類の平和に資することを目的としてさまざまな活動や事業を行ってきました。

その一つである研究事業においては、「倫理文化学」の構築を目指して、倫理研究所が提唱する純粋倫理の研究はもとより、内外の倫理思想、日本文化等の研究を推進し、その成果を、月刊誌、論文集、単行本、倫理研究フォーラム、内外の学会・学術会議などで発信しています。

平成二十九年四月現在、月刊誌『倫理』は通巻七七二号、論文集『倫理研究所紀要』は二十五号、単行本『倫理文化研究叢書』は本書を含め六冊を刊行するに至りました。また、平成三年より毎年、倫理研究フォーラムを開催しています。

一昨年の平成二十七年九月、倫理運動は、創始七十周年を迎えました。これを機に、研究事業を推進する部門の「研究センター」は、対外的には「倫理文化研究センター」という名称で研究成果を発信することになり、それを記念するとともに、倫理運動創始七十周年記念事業の一環として、同年九月二十九日と三十日の二日間、「倫理文化研究センター発足記念シンポジウム」を開催しました。本書はその内容をまとめたものです。

シンポジウムの全体テーマは「生と死」。ここでは、日本、中国、韓国の十名の研究者による研究発表と

質疑応答、そして討論会を行いました。以下、研究発表と討論会の内容について概要を記しておきます。なお研究発表者等の肩書はシンポジウム開催時のものです。

## 一、研究発表の概要

生と死の問題、とりわけ死の問題は、私たち人間にとつての根本問題であり、昔から哲学や倫理学をはじめ各領域で繰り返し採り上げられてきました。現代においても、人間の生は死によつて断たれるのか、生と死は連続するののか、連続するとすればどのような意味において連続するののか、あるいは、死後の生はあるののか、魂は不滅なのか、死によつて消滅するののか、など生と死を巡るさまざまな問題が論議されています。

また近年は、「生と死」を人間だけの問題に限定するのではなく、私たちを取り巻くさまざまな物や事柄・事象の「生と死」を考察する論考も見られるようになりました。本シンポジウムの研究発表では、全体テーマである「生と死」に基づいて、十名の発表者がそれぞれの専門とする研究分野から「生と死」の問題を捉え、論じています。

「生と死と〈連続性〉」（平良直・倫理文化研究センター特任研究員・八洲学園大学准教授）では、「生」と「死」は、対語として考えるものであり、両者が切断されて片方だけでは語りえないのだということがまず確認されます。そして人間が死と向き合うことによつて、生の意味や、存在の神秘や不可思議さに気づくことができるのだということを、私たち人間の多くが体験する事例を通して明らかにしました。また、「死」と向き合い、生の意味が問われる中で、人間が生きているこの世界がさまざまな〈連続性〉の中に成立しているこ

とが照らし出だされるのであり、さらに、宗教学の蓄積に依りながら、死や死者と向き合うことが、人間社会の根源的な倫理観を培ってきたのだとしています。

同じ東アジア文化圏として括られている中国・韓国（朝鮮）・日本においては、主として儒教（儒学）や道教（道家）思想が文化の共通基盤としてあり、とりわけ、死に対する考え方や死にまつわる儀礼（葬礼・祭礼）においても共通するものが存在すると言われています。ではたして、儒教や道教においては、そもそも生と死をどのように捉えているのか、そしてその捉え方はどのように変遷してきたのか、また死の葬礼や祖先の祭礼とはどのようなものであり、それはどのような思想に基づいて行われてきたのでしょうか。

古代中国の道教思想の代表的な著作の一つである『莊子』には、「死」に関わる多くの言説が収録されていて、その中に、死を凝視する、切実で真剣な姿を見出すことができます。このことから、『莊子』は中国思想史にあつて死の問題を本格的に追究した最初の書物と位置づけられました。「死への凝視——『莊子』」（オムツギ嚴錫仁・倫理文化研究センター研究フェロー・筑波大学准教授）は、そのように切実で真剣であるがゆえにむしろ逆説性を帯びる『莊子』の哲学的思索が投げかけてくる死の意味や死の克服、そしてその意味での望ましい生の姿を、今日の死の観点においても一度再構成してみようとする試みです。

道教思想の『莊子』が死の問題を本格的に論じたのに対して、「まだ生きるということも知らないで、どうして死ということがわかるものか」という『論語』の中の孔子の言葉が示しているように、儒教思想は現世中心で、死について無関心であると言われています。しかしながら、儒教は、死に対する空しい論議は避けたものの、死に関して決して無関心な思想などではなく、また死の問題を消極的に捉えているのではない

ことを、儒教儀礼の中でも大きな比重を占めている喪礼（葬礼）と祭礼（祭祀）を取り上げて、儒学者たちが考えていた死の観念を考察したのが、「伝統喪・祭礼の意味から見た儒教の死の観念」（李致億・誠信女子大学東洋思想研究所研究教授）です。本論文では、儒教は、生と死を一つの線上に置いて考える学問であつて、人間は、先祖と子孫とを媒介する永遠な存在として生きているのであり、私たちは、断絶した個体ではなく、先祖の命を受け継いだ存在で、後の世にその生命を繋ぐ義務のある存在であることを論じています。

儒教思想を集大成したと言われている朱子（朱熹の尊称）の思想（朱子学）が、わが国に本格的に受容され始めたのは江戸時代に入ってからで、とりわけ、林羅山をはじめとする林家は、徳川幕府の教学の責任者となり、江戸時代における朱子学の発展に貢献しました。

朱子の生前作と言われるものに『家礼』（「文公家礼」「朱子家礼」とも称す）があります。『家礼』は、冠婚葬祭の諸作法を記したもので、喪礼や祭礼についても、儒教思想に基づく祖先祭礼の作法が具体的に示されています。その「家礼実践」の先頭に立つて、日本的儒式葬儀・墓制をまとめ上げたのも林家であり、林家は近世日本の儒式葬儀の導入に大きな役割を果たしました。「死は生なり——林家における『文公家礼』『葬送礼』の実践を例にして」（龔穎・倫理文化研究センター特任研究員・中国社会科学院哲学研究所教授）は、朱子の『家礼』を吟味しつつ、独自の喪礼・葬儀方法の創出に努めた林家の取組みに言及したものです。併せて本論文では、倫理研究所の創設者であり、「純粹倫理」の唱道者である丸山敏雄の「死生観」から見た林家の臨終や葬礼の具体的実践についても考察しています。

歴史の観点から、李氏朝鮮時代（一三九二—一九一〇）の死生観を論じた「朝鮮時代における死について

の理解——生死、鬼神、祭祀の概念を中心に」(韓睿嫻・朝鮮大学教授)は、儒教思想における死生観の変遷、天寿を全うする死と事故や天災などによる天寿を全うしない死の責任の問題、その場合の遺族による葬礼・祭祀と公共(国家)的な葬礼・祭祀の問題に言及しました。また、本論文では、親・祖先の祭祀は、家においては子孫の孝行の道であり、子孫のいない死者の祭祀は国が行うことが良い政治であり、それが道徳社会の本来の姿であることを現代の韓国の社会状況を踏まえながら論じています。

生と死の問題、とりわけ生(出産)の問題に焦点をあてて論じているのが、「医療化以前の出産における介助者の役割に関する一試論」(松本亜紀・倫理文化研究センター専門研究員)です。従来、人間は介助者なしには出産できないと言われており、その言説は学術分野を超えて現代女性の出産観にも広く影響を与えています。本論文では、文献調査やフィールドワークの成果から、人間は身体的には介助者がいなくてもひとりで出産できるという可能性を提示するとともに、出産介助の役割の本質について考察しています。

古来、日本には、モノには命があり、魂が宿るといふ信仰にも近い思想があります。そして、そのモノが役割を終えると供養を行い、感謝の心を表してきました。人間や生物だけではなく、生と死はモノにもあることを論じたのが、「モノの生と死」(寛ボルテール・倫理文化研究センター専門研究員)で、日本での「モノの生と死」について文化人類学及び比較文化研究の観点から考察しています。日本人がモノに対し感じる愛着や恐怖心、神聖性を、その現われとしての妖怪や付喪神(つくもがみ)を例示しながら述べています。また、モノの供養行事を題材に「モノの死」について言及し、モノに溢れた現代の生活の再考を提起しています。

ところで、ふだん私たちは、日々安定した生活を送れているのはなぜなのか、と考えることはめったにありません。が実は、私たちは、人々の協力や協調によって、公園や道路、交通機関、秩序や国防体制などの公共財産を形成し、安定的な社会を作り上げることによって生活しているのです。そして、そのような公共財産を形成するには、時間や労力などのコストを払わなければなりません。問題は、誰がそのコストを負担するかです。公共財産は、すべての人に使用する権利があるにもかかわらず、中には、コストを負担せず、ただ乗りすることが得であり、協力することは損であると言う人がいるかもしれません。そこで、人々が損を受け入れ、損を乗り越えて、協力的な振舞いをするよう構築されたのが、社会的な懲罰制度というものであり、そのことについて論じているのが「懲罰制度の発展における『社会的死』の必要性」(内田智士・倫理文化研究センター研究員)です。本論文では、懲罰制度という嫌な制度を、人々はどのようにして受け入れるようになったのか、そして人が懲罰制度に従うようになるプロセスはどのようなものかという問題を、政治哲学者ジョルジョ・アガンベンの論考に依拠しながら、社会からの徹底的な締め出しⅡ社会的な死という観点から考察しています。意外なことに、懲罰制度が根付くためには、私たち一人ひとりの中に社会的な死の部分がなければならないことが結論として導かれています。

仏教には輪廻思想があり、それと関連して、生物の存在の一サイクルを四段階(四有)に分ける考えがあります。四有の一つが中有<sup>ちゆう</sup>あるいは中陰<sup>ちゆういん</sup>というもので、死んでから次の生を受けるまでの期間であり、仏式では四十九日目には「満中陰の法事」を行ってします。また、私たちは、「月の満ち欠け」と「潮の満ち引き」と「人の生と死」の関係についての話を耳にします。一体、中有(中陰)と月とはどのように関係す

るのか。「月と中有——生と死の境目」(高橋徹・倫理文化研究センター専門研究員)は、世界各地の神話において、しばしば太陽は昼の世界に関連づけられ、月は夜の世界に関連づけられることを踏まえて、月のこの神話的あるいは神秘的な側面に着目し、月は人間の生死とどのように関わるのかを古代の文書や古今の文芸作品を土台にして解き明かそうと試みる論考です。

最後の「中小企業の退出と存続」(津島晃一・倫理文化研究センター特任研究員)は、企業にも「生」と「死」は存在するとの視点から、企業存続の方途について論じています。欧米と異なり、日本では、企業存続のために、会社を売却することによって後継者を確保するという可能性が低いことを踏まえた上で、日本の中小企業が、退出としての廃業を回避して存続を図るには、事業承継を行うための後継者育成が欠かせないこと、そしてそのためには、経営者は、社内の後継者候補に早くから業務の委任を行って育成を図る必要があることを本論文は提起しています。

## 二、討論会について

討論会は、一日目と二日目の研究発表の後で行われ、研究発表者のほかに、総合司会者として丸山敏秋(一般社団法人倫理研究所理事長)、それに野中寛治(倫理文化研究センター研究員)、石井雅之(倫理文化研究センター特任研究員・八洲学園大学教授)、丸山貴彦(倫理文化研究センター特任研究員)が参加しました。

十名の研究発表内容から明らかなように、「生と死」というテーマが包含する研究課題は多岐に亘っており、また、それぞれの課題や問題について明確な結論を下すということは非常に困難でもあります。そこで

討論会では、何らかの結論を得るための討論ではなく、「生と死」をテーマにする時に浮かび上がる検討課題を明確にし、それらを討論参加者各自の今後の研究に反映させていくことをねらいとして、主に次のような問題について意見を交わしました。

- ・ 実体としては存在しない死をどのように捉え、どのように受け入れるかという死の受容の問題
- ・ どこからどこまでが人生であると言えるのか、また、死後の人生はあるのかという生と死の連続性の問題
- ・ 葬送儀礼や祭祀など、死者に対する倫理の問題
- ・ 他者の死の受容の問題

・ 生の存続（延命治療）、安楽死（尊厳死）、自殺、他殺（中絶や死刑を含む）、自己犠牲としての死など、死の操作の是非と倫理の問題

- ・ 企業、伝統文化、物、家、生物、生態系などの死の問題

二日間の討論を通して、参加者各自は、「生と死」は私たち人間の根本問題であることはもちろんのこと、「生と死」を人間だけの問題として捉えるのではなく、今後さまざまな「生と死」の問題についてより深く探究していかなければならないことを改めて認識することができました。

本書を、「生と死」の問題を考える契機にさせていただければ幸いに思います。

平成二十九年五月

一般社団法人 倫理研究所



# 目次

目次

序に代えて

第一部 「生と死」 発表

第一発表

生と死と〈連続性〉

平良直

16

15

はじめに

1. 「死は概念」か？／2. 存在の連続性―自身の体験から
3. 東日本大震災が顕わにした祭りの根源的意味
4. 死者と生者の世界の連続性／結びにかえて

【質疑応答】

第二発表

死への凝視——『莊子』

嚴錫仁

46

はじめに

1. 死——個別的存在としての問い／2. 「運命」としての死
3. 「死生一条」の論理／4. 死生超脱の生き方／結び

【質疑応答】

第三発表

伝統喪・祭礼の意味から見た儒教の死の観念

李致億

94

はじめに

1. 儒学者たちが言う死／2. 三年喪、位牌、四代奉祀
3. 慎終追遠、死から生へと終わりに／付録

【質疑応答】

117

#### 第四発表

死は生なり——林家における『文公家礼』

「葬送礼」の実践を例にして 龔 穎……………125

1. 林家と江戸時代における『文公家礼』の実践
2. 林家と羅山の長男である林叔勝の臨終
3. 羅山の妻・亀の病死とその「神主」（位牌）の書き方をめぐって  
終わりに

【質疑応答】……………141

#### 第五発表

朝鮮時代における死についての理解

——生死、鬼神、祭祀の概念を中心に 韓 睿 媛……………147

はじめに

1. 性理学的な生死観の意義／2. 理気論的な鬼神についての理解
3. 孝の実践としての祭祀／終わりに

【質疑応答】……………171

#### 第六発表

医療化以前の出産における

介助者の役割に関する一試論 松本重紀……………181

はじめに——問題意識とその背景

1. 「人間は介助者なしには出産できない」言説の根拠とその影響
2. 出産介助者の歴史と介助者なしの出産記録
3. 青ヶ島村における医療化以前の出産介助の実態／考察

【質疑応答】……………204

第七発表 モノの生と死 寛ボルトール ..... 213

- はじめに
1. モノの生と中世日本―付喪神の登場／2. 付喪神の文化人類学的解釈
  3. モノの生と近現代日本／4. モノの生―諸外国の例
  5. モノの死―モノの供養行事
- まとめ

【質疑応答】

第八発表 懲罰制度の発展における「社会的死」の必要性 内田智士 ..... 235

- はじめに
1. 協力・協調と懲罰制度／2. 因果の反転による制度の安定化
  3. 社会的死による社会的生の維持

【質疑応答】

第九発表 月と中有―生と死の境目 高橋徹 ..... 267

- はじめに―昔の人は月の働きをどのようなものとしてとらえていたのか？
1. 『ヘルメス文書』に見る月の働き
  2. ゲーテの『メルヒェン』、エンデの『はてしない物語』に見る月の性質
  3. 月の「原初的な二分法」とは何か？―その天文学的側面を見る
  4. 過去と未来はカクリヨにある
  5. ヨモツヒラサカとヤチマタ―『古事記』に描かれた中有
  6. 「アンタラー・ババー」の詠語としての中有（中有界）の意味
  7. 月と中有界なのか？／結語

【質疑応答】

第十発表

中小企業の退出と存続

津島晃一

296

はじめに

1. 経営者と企業の退出／2. 生き残りとしての事業承継
3. 望ましい退出と事業承継／結論

【質疑応答】

317

第二部 「生と死」 討論

討論（二日目）

327

討論（二日目）

344

あとがき

366